連研修了者研修会□1
阿弥陀さまと私□2
新・祖蹟点描□3
創刊100号記念特集□4
本山・教区・各組の動き□10
つれもて聴こら□12

さぎのもり
『紀伊国名所図会』に描かれた江戸時代後期の鷺森御堂
2014年（平成26年）
4月1日
第100号
発行：「御同朋の社会をめざす運動」和歌山教区委員会　〒640-8053　和歌山市鷺森1番地　本願寺鷺森別院内　℡(073)422-4677　URL　http://saginomori.or.jp/

継続的学びの場

鷺森別院で連研修了者が研修

新米門徒推進員さんが中央教修の体験報告

和歌山教区連研修了者研修会が3月2日、「組連研を修了して…」をテーマに鷺森別院で開かれ、門徒推進員17人を含む40人が参加。教区内各組では、各寺院所属の門信徒を対象に、門徒推進員養成のための「連続研修会」（連研）を開いているが、このたびの研修会は、各組の連研修了者を対象に、意見交換と学びの場を提供しようと年に一度開かれているもの。

参加者は8人ごとに分かれ「組連研を修了して…」のテーマに沿って1時間の話し合いを行い、班ごとにその内容を発表した。

続いて、2013年度に新しく門徒推進員になった池上徳松さん（御坊組・常福寺）と新井和美さん（和歌山西組・正善寺）が、本山で中央教修を受けた体験と現在の門徒推進員としての活動を報告。

最後は連研中央講師の小滝信生師がまとめの講義と質疑応答を行った。

門徒推進員

門徒推進員とは、門徒の先頭に立ち、教区・組・寺院と連携しながら、寺院・家庭・職場・地域などの日常生活に根差した場で「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）を推進する方。

各組の連研を修了、さらに西本願寺での中央教修（3泊4日）を経て、登録・委嘱される。

3月30日「孫市まつり」

講演会「雑賀衆と鷺森御坊」も

戦国時代、本願寺と織田信長が戦った大坂合戦で、鉄砲を駆使して目覚ましい活躍をした鈴木孫一（雑賀孫市）と雑賀衆を紀州のヒーローとして盛り上げる、恒例の「孫市まつり」が3月30日午前11時から午後4時まで、鷺森別院と周辺で開かれる。10回目となる今年も、武者行列、鉄砲演武、音楽ステージ、歴史キャラさみっと、野外劇「信長が一番恐れさせた男　孫市参上！」と多彩な催しがある。

「雑賀衆と鷺森御坊」と題した講演会では、鷺森別院南側の城北小学校グラウンドで進められている発掘調査で新たに分かったことを紹介しながら、和歌山北組・善勝寺住職で和歌山市和歌山城整備企画課の武内善信師らが話す。

別院本堂バックに鉄砲演武

創刊100号 4～9面 記念特集

法統継承式概要

前号でお伝えした「法統継承式」は、6月5日午後3時半から西本願寺御影堂で、西本願寺住職と宗派門主を退任されるご門主の御消息発布式。翌6日午前10時から阿弥陀堂と御影堂で、新門さまへの法統継承式の「法要」、続いて御影堂で「式典」が行われる。

阿弥陀さまと私

ハウツー仏事

②ご本尊

前回も申しましたように、浄土真宗におけるお仏壇とは、ご本尊である阿弥陀如来さまにお敬いの形を表すとともに、ご本尊を中心としてお荘厳（お飾り）することによって、私たちがお浄土の世界を味わわせていただくための大切な場所です。ご本尊こそが最も大切なのです。

ご本尊を中心としたお飾り

お仏壇には正式なご本尊を

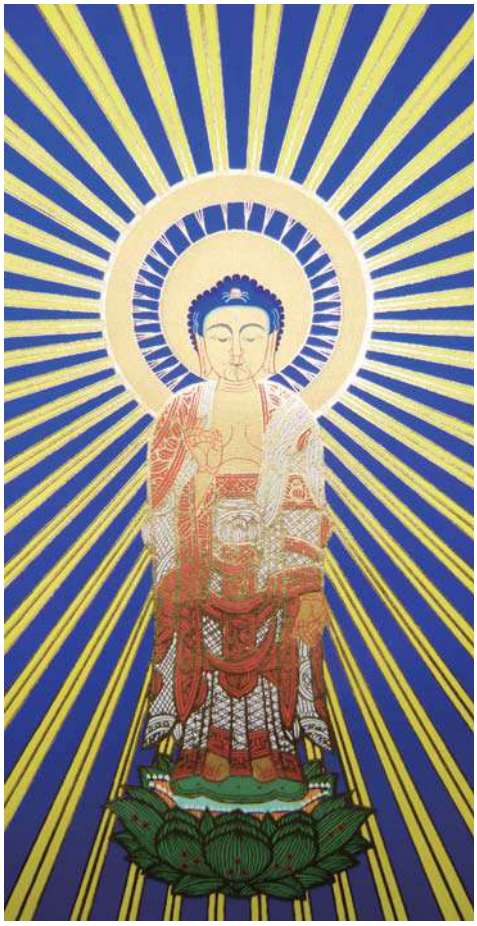
お仏壇にご安置するご本尊の形としては、絵像、名号（南無阿弥陀仏）、木像がありますが、一般のご家庭に最もふさわしいのは「絵像」でしょう。しかも、仏壇店で販売している、いわゆる「町版」といわれるご本尊ではなく、本山西本願寺の正式なご本尊をご安置しましょう。

では、町版のご本尊と本山正式のご本尊とでは何が違うのでしょうか。

伝統技術の結晶

町版はほとんどが印刷された物ですが、正式なご本尊は、京都西本願寺の近くにあって、400年以上の歴史と伝統を守り伝える「本願寺法物調進所・絵表所」で、古来から受け継がれてきた伝統技法によってつくられています。

そのすべての工程が絵師や表具師による手作業で、例えば〝截金〟という金箔を細かく切って、筆などを使って貼り付ける技法などを駆使して、阿弥陀さまのお姿や後光などが描かれています。



伝統技法によって細部まで手作りされた正式なご本尊

ご本尊の裏書と証印

裏には本物の印

また、お軸の裏には正式なご本尊である証しとして、本願寺の歴代ご門主のお名前と証印が押されています。

現在は第24代即如門主の証印が押されていますが、6月6日、本願寺では37年ぶりの〝お代替わり〟である「法統継承式」が行われますので、その日以降は、第25代専如門主の証印が押されることになります。

ご本尊は免物

ご本尊の大きさは30代、50代、70代など「代」で数えますが、数字が大きいほど、お軸も大きくなります。

お軸の表装には、金襴、桐、藤、松という4種類があり、お好みの物を選ぶこともできます。

なお、本山からお受けするご本尊のことを「免物」ともいい、お受けするためのお金を「冥加金」といいますが、つまり、一般の商品のような物品販売ではないということです。このため返品はできませんので、本山からお受けする際は、大きさなどを十分に確認しましょう。

結果的に費用は比較的高額になりますが、正式のご本尊には、それに替えられない価値があることは、ご理解いただけたと思います。

お寺にご相談を

お仏壇購入時に正式なご本尊をお迎えするのが一番ですが、〝お洗濯〟と言われるお仏壇の解体修理のときも、いい機会です。

お申し込みは、西本願寺の参拝教化部・免物係へ直接出向かれても結構ですが、所属寺院を通して「在家免物申込み」の手続きをされれば、事務手続きも簡単です。お手次ぎのお寺までご相談ください。

（松本教智・「御同朋の社会をめざす運動」和歌山教区委員長）

鷺森テレホン法話（おにしさん）
073-422-0243

こころの電話（海南組西光寺）TEL(073) 487-2430
ヤングこころの電話（同　上）TEL(073) 487-0404
こころの電話（御坊組専福寺）TEL(0738) 44-0874

新 祖蹟点描

2 日野誕生院

階段を上り日野誕生院へ

世は末法であるという。現代のことではない。親鸞聖人がご誕生された時代のことである。

お釈迦さまの入滅を紀元前949年とする中国の考え方に基づき、仏法と行とさとりが円満した「正法」の時代1000年と、仏法とこれを行ずる人はあっても、さとりに至る人のない「像法」の時代1000年が終わり、1052年（永承7）には、仏法だけが残り、これを行ずる人もさとりに至る人もない末法の世が到来すると考えられた。

実際、この頃から災害や戦乱が続発したため、末法到来という意識はいやが上にも強まった。

平安初期の建築様式を用いた別堂

1053年に藤原頼通が宇治に平等院阿弥陀堂（鳳凰堂）を建立し、親鸞聖人の出自であるという日野家でも同じころに法界寺を建てて浄土往生を願ったのも、一つには末法意識の表れだったという。

親鸞聖人ご誕生の地

文政年間建立の有範堂がルーツ

親鸞聖人の産湯に使われた井戸㊨と胞衣塚㊦

親鸞聖人がご誕生された時代は、末法の世に入ったとされてから121年が経ち、末法が既成事実のように人々の心に影を落としていた時代だったのである。

さて、前回訪れた法界寺をあとにして、その東隣にある日野誕生院に足を向ける。ここは親鸞聖人ご誕生地の由緒を持つお寺。

親鸞聖人のご誕生といえば、5月21日にご誕生日をお祝いして「宗祖降誕会」を勤めているが、これは旧暦4月1日を新暦に直したもの。4月1日説に確かな根拠はないものの、1717年（享保2）に真宗高田派の良空師によって刊行された『親鸞聖人正統伝』が親鸞聖人のご誕生を「四月朔日」（朔日は一日）とし、これが広く読まれたため定着したのだという。

日野誕生院のルーツは、1828年（文政11）9月、本願寺第20代広如上人のときにこの地に建てられた堂宇にさかのぼる。このお堂は、親鸞聖人の父・有範公にちなんで有範堂とも、また宝物堂とも呼ばれた。

現在の中心伽藍である別堂は、1931年（昭和6）に完成したもの。平安時代初期の建築様式にのっとり、堂の前庭には三方に回廊をめぐらし、中央には金灯籠を据えるという珍しい形式。

堂内には、ご本尊阿弥陀如来の向かって右側に親鸞聖人、左側に前門さま（勝如上人）の御影（絵像）が掛けられ、向かって左側の余間には有範公の木像が安置されている。

このお堂を本堂ではなく別堂と呼ぶのは、ここが西本願寺の飛地境内地だから。本堂は西本願寺にあるというわけである。

境内には、親鸞聖人の産湯に使われた井戸と、胞衣（胎盤やへその緒）を納めた「胞衣塚」もある。

毎年5月19日午後2時からは、親鸞聖人の「誕生会」がご門主ご親修で勤められている。どうぞお参りを。

（本紙編集部）

日野誕生院

場所　京都市伏見区日野西大道町19
電話075(575)2258
交通　京都駅からJR奈良線で約20分、「六地蔵」駅下車、同駅から京阪バス「日野誕生院」行で16分、「日野誕生院」下車、すぐ。

和歌山教区と鷺森別院　あのとき

本紙が歩んだ100号41年

当時の記事、見出し、写真で振り返る

1973年(昭和48)7月1日に産声を上げた本紙は、創刊以来足かけ41年、今号で100号発刊の日を迎えた。これまでの歩みを本紙が伝えたニュースで振り返る。

創刊は宗門の大法要を機に

本紙の創刊は、西本願寺で3月17日から3期20日間にわたり盛大に勤められた「親鸞聖人御誕生800年・立教開宗750年慶讃法要」が、5月21日に円成したばかりのことだった。

その法要のご満座の御消息で大谷光照門主（当時）が示された「このたびの勝縁を機として、大いなる決意をもって宗門の再出発に踏み出し、社会の期待に答えなくてはなりません」とのお言葉に応えるように、創刊号巻頭ページには、3師が言葉を寄せている。

当時の和歌山教区教務所長・中岡順孝師は、「世紀の大祭典とも言えるご法要のご勝縁にめぐりあえた幸いをよろこびつつ、いよいよ八〇一年、七五一年の意義をたしかめあい、ともに教法社会の生成を期する時がまいりました。情報産業がめざましく発達しつつある現情勢下にあって、かねてよりの懸案であった『教区報』を有縁の方々のご助力により御誕生法要を機会に、発刊のはこびとなりましたことは意義深いこと」と喜びをつづっている。

本紙創刊号巻頭ページ

本紙が伝えた主な出来事

1973(昭和48)
- 7・1　和歌山教区報第1号発行

1975(昭和50)
- 7・5　第8号より「紀州御旧跡めぐり」連載開始(第13号まで6回)

1977(昭和52)
- 2・10　第14号より「紀州の御法物」連載開始(第16号まで3回)
- 4・1　法統継承式(西本願寺)
- 5・7　和歌山教区仏教壮年会連盟結成大会

1978(昭和53)
- 4・22、23　親鸞聖人七百回大遠忌・御誕生八百年・立教開宗七百五十年慶讃法要(鷺森別院)

鷺森別院三法要でにぎわう

―1978年(昭和53)4月22、23日

鷺森別院世紀の大法要（親鸞聖人七百回大遠忌法要 親鸞聖人御誕生八百年立教開宗七百五十年）は、陽春四月二十二日、二十三日の両日にわたり盛大に厳修された。

好天に恵まれた当日、境内は大テントが張られ、本堂は五色のどんちょうに飾られ、二本の吹き流しで法要気分も、最高に盛り上がった。

和歌山組、西・北・海草組の善男善女でたちまちの中に満堂となり、境内はお稚児の参列者、帰敬式受式者で大きな列をつくっている。

雅楽の中を別院輪番、参勤、承仕、列衆、結衆が着座、前門様が祖師前で焼香、登礼盤なされ、表白、画讃、正信偈がおごそかに満堂にひびきわたり、参拝者もともども唱和して法要も最高の雰囲気となる。

午後の逮夜法要には庭儀があり、境内はお稚児、裃、昵近、楽人、列衆、結衆が参列、鷺森町内を一周、沿道は人垣で賑わった。

午後も大勢の帰敬式受式者が集まり、幼稚園舎と本堂の二会場に別れて行なわれた。

そのあと前門さまは境内山門横に記念植樹（ウバメカシ）を行なわれ、第一日目の法要を無事終えられ帰京された。（第19号から）

御導師をされる前門さま

1979(昭和54)
西本願寺本堂(阿弥陀堂)昭和の大修復始まる
1980(昭和55)
4・1　伝統奉告法要(西本願寺)～10・6まで
5・25　和歌山教区少年連盟結成
1984(昭和59)
5・30　本願寺本堂昭和修復に際しての消息披露(鷺森別院)
1985(昭和60)
10・27　少年連盟結成5周年大会
5・22　阿弥陀堂昭和修復完成慶讃法要(西本願寺)～5・31
1986(昭和61)
5・21　初参式についての消息発布
9・12　臨時教区会において基幹運動の区令可決
1987(昭和62)
3・14　寺族青年連盟結成(和歌山教区)
2・13　顕如宗主四百回忌法要・本願寺寺基京都移転四百年法要の消息披露(鷺森別院)
1988(昭和63)
11・28　鷺森別院顕如上人四百回忌法要実行委員会発足
1989(平成1)
9・23　即如門主、本願寺鷺森別院に対する消息発布
10・23　ご消息披露の式
1990(平成2)
4・21、22　顕如上人四百回忌・紀州門徒殉難者総追悼法要
11・21　日高別院太鼓楼修復落慶法要
1991(平成3)
4・4　顕如上人四百回忌法要・本願寺寺基移転四百年法要始まる(西本願寺)～5・29
1992(平成4)
1・16　蓮如上人五百回遠忌法要についての消息発布

顕如上人400回忌・紀州門徒殉難者総追悼法要

—1990年（平成２）４月21、22日

去る四月二十一、二日の両日にわたり、鷺森別院で、顕如上人四百回忌法要・紀州門徒殉難者総追悼法要が盛大に勤修された。時おりの小雨にもかかわらず、二十一日はご門主さま、二十二日には前門さまのご親修で、午前の部・午後の部と四座の法要に、本堂内は参拝者で両日とも埋めつくされた。

二十一日、午前九時、ご門主さまは教区内僧侶・お同行に迎えられ別院にご到着。法要開始を今か今かと待つ中、十時に喚鐘が鳴り響くと、列衆、結衆に引き続き、藤下輪番が入堂。奏楽人による雅楽が奏される中、僧綱の伊井智昭総務を伴って、ご門主さまがご入堂。本堂内は静寂な雰囲気に包まれた。

登礼盤ののち、ご門主さまは戦乱の世であらゆる困難にたち向かい、お法りを護り伝えられた顕如上人のご生涯、石山合戦で身命をかえりみず本願寺を守った紀州門徒のご苦労をたたえる表白を口語体で拝読され、参拝者らは先人のお心を肌で感じとっていた。

その後「正信念仏偈」を全員で唱和、本堂内にお念仏の声が響きわたった。

（第45号から）

和歌山教区全戦没者50年追悼法要

—1994年（平成６）７月８日

昭和二十年七月九日は、「和歌山大空襲」の日。死者千百一人、傷者四千四百三十八人にのぼったと記録されているこの日を記念して、前日に当たる今月八日、「和歌山教区全戦没者五十年追悼法要」が厳粛なうちに営まれた。

この日、和歌山市民会館大ホールは千四百人の参拝者で埋め尽くされ、午後一時、喚鐘が鳴り響く中、教区内の法中が入堂。荘厳な雅楽が流れる中、法要が始まった。

お勤めの前に、遺族を代表して中谷君子さんが「追悼のことば」を読み上げた。

この中、実兄が満州で戦死したことに触れながら「戦争で尊いいのちが失われたことを思うと、胸が痛む」と披瀝。

そして「戦争を知らない人に真実を伝えることは残されたものにとっての義務。念仏者としてこの法要を機縁として平和社会の実現に向けて努力したい」と涙をこらえながら力強く訴えた。

（第53号から）

3・6　仏教婦人会連盟結成20周年記念大会
5・11　二尊会・ご遷座法要（～5・16）
11・23　鷺森別院本堂・書院全焼

1994（平成6）
7・8　和歌山教区全戦没者50年追悼法要（現在、平和を希う念仏者の集いとして勤修）

1995（平成7）
2・17　ビハーラ和歌山結成式
4・8、9　鷺森別院本堂落成慶讃法要

1996（平成8）
2・9　点検糾弾会

1997（平成9）
6・6　「和歌山県同宗連」結成大会
10・17　和歌山教区蓮如上人五百回遠忌法要

1998（平成10）
3・14　蓮如上人五百回遠忌法要始まる（西本願寺）

1999（平成11）
5・1　鷺森テレホン法話開設
御影堂平成大修復起工

2000（平成12）
10・6　和歌山教区同朋運動五十周年記念法要
12・9　少年連盟結成二十周年

2001（平成13）
「阿弥陀さまと私―浄土真宗の葬儀と仏壇」刊行

2002（平成14）
6・12　和歌山教区仏教婦人会連盟結成30周年記念大会
10・30　鷺森別院蓮如上人五百回遠忌・別院再建十周年記念法要実行委員会発足

2004（平成16）
4・1　第72号から紙面をA4判に変更し、紙名を教区報「さぎのもり」と改称。「蓮如上人と紀州」連載開始（第74号まで3回）
10・14　第30回西本願寺近畿地区仏教婦人会記念大会

2005（平成17）
1・1　第75号から全面カラー刷りに
3・26　鷺森御坊と孫市の街～花まつり（二法要記念行事）
4・9、10　鷺森別院蓮如上人五百回遠忌法要・再建十周年慶讃法要
8・1　「親鸞聖人七百五十回大遠忌受門長期振興計画」施行（本山）
9・1　親鸞聖人七百五十回大遠忌法要にかかる総局巡回
11・1　第78号「お寺の雑学コーナー」連載始まる（第84号まで7回）
12・17　鷺森別院幼稚園創立八十周年記念式典

2006（平成18）
和歌山教区ホームページ開設

2007（平成19）
3・1　新装版「阿弥陀さまと私」発行

2008（平成20）
4・15　新「教章」制定

2009（平成21）
5・22～26　西本願寺御影堂平成大修復完成慶讃法要（本山）
6・29　新門さま、和歌山教区巡回・鷺森別院巡拝
10・7　新門さまご夫妻、日高別院を巡拝

2010（平成22）
3・4　親鸞聖人七百五十回大遠忌お待ち受け近畿大会
10・7　親鸞聖人七百五十回大遠忌安穏灯火リレー
11・24～28　鷺森別院親鸞聖人七百五十回大遠忌法要

2011（平成23）
3・1　第93号から「祖蹟点描」連載開始（第96号まで4回）
4・9　親鸞聖人七百五十回大遠忌法要始まる（本山）
9・3、4　台風12号（紀伊半島豪雨）

2012（平成24）
1・9～16　大遠忌法要御正当
5・8　「御同朋の社会をめざす運動」和歌山教区委員会設置規則制定
12・19　「専門部会設置に関する内規」制定

2014（平成26）
1・1　第99号から「阿弥陀さまと私」「新・祖蹟点描」連載開始。

本堂再建　紀州門徒、喜びの春

―1995年（平成７）４月８、９日

昨年十一月、本堂の再建工事を終え竣工した鷺森別院（藤下恒庸輪番）では、今月八・九の二日間、ご門主親修で「本堂落成慶讃法要」が営まれ、教区内は喜びに包まれた。

「花まつり」の法要初日には春の暖かい好天に恵まれたものの、二日目には雨。しかし境内の桜も満開に咲きほころぶ中、両日で三座の法要が営まれ、教区内の住職ら門信徒約五千人が参拝、新しいお念仏の道場が完成したことを喜び合った。（中略）

法要初日の午後一時半、境内に稚児百二十人が整列、同別院の周りを約三十分かけて庭儀。歩道を歩くかわいい稚児に道行く人も車を止めて見入る姿もあった。

庭儀の行列が本堂内に入りいよいよ法要開始。ご門主はこれまでの別院の沿革をおりこんだ「表白」を読み上げた。

そして参拝者全員で「正信偈」を唱和。引き続いて、ご門主のご親教では、別院の歴史を振り返りながら「立派な器ができ、それを中心に活用していただき、お念仏の友の輪が広がり、お念仏に支えられた人が世の中に活躍してくれる基礎となるように念願します」とお言葉が述べられた。

（第54号から）

「蓮如上人500回遠忌法要」勤まる

―1997年（平成９）10月17日

十月十七日、和歌山市民会館で「和歌山教区蓮如上人五百回遠忌法要」が営まれ、教区内全組から門信徒ら千六百人が参拝。法要を終えて「よきご縁に遇えて最高の幸せ」と喜んだ。

午前十時三十分、喚鐘の音とともにステージの幕が上がると、ご本尊を中心に左右に教区内の僧侶三十七人が着座。会場から驚きの声がもれる。

十林順正教務所長が登礼盤を行い、参拝した千六百人の声が一つとなって「奉讃蓮如上人作法」が勤められた。続いて、「聖人一流の章」の御文章拝読が行われ、参拝者らは頭を下げて聴聞した。

この後、中央仏教学院講師の清岡隆文氏が「あなかしこ、あなかしこ」と題して記念法話。（中略）

午後からは記念行事を開催。今日の社会を取り巻くさまざまな問題について、おもしろおかしく語る落語家・月亭八方さんの漫談「こころの時代」、落語家の桂都丸さんは、蓮如上人の逸話をもとにした「嫁おどし」を披露、そして新屋英子さんによる一人芝居「わたしの蓮如さん」を上演。上人のご生涯を一時間半にわたって熱演、参拝者らは熱心に見入っていた。

（第59号から）

同朋運動５０周年法要営む

―2000年（平成12）10月６日

去る十月六日、鷺森別院本堂で、「和歌山教区同朋運動五十周年記念法要」が営まれ、門信徒や僧侶、本山や運動団体の関係者など三百五十人が参拝した。（中略）

おつとめ後、「かりょうびんが鷺森」によるコーラスが披露された。この後、行われた記念式典では、まずあいさつに立った弁巴隆夫基推委員長は「このたびの法要を機縁として、部落差別の解決、人権の確立のため、一層積極的に同朋運動推進に取り組む決意を新たにしたい」と述べた。

（中略）

この後の記念講演では、基幹運動本部員の森本覚修氏が「とも同朋にもねんごろに」と題し「平等社会を願った先人の遺志を受け継ぐとともに、差別を肯定する教学課題などの克服に努めることが大切」と語った。

閉会式では、「先人のご苦労に感謝しつつ、今後、宗門人一人ひとりが、私と教団の差別の現実を改め、部落差別をはじめとするあらゆる差別の撤廃に取り組み、真の同朋教団の確立をめざすことが、二十一世紀を迎えんとする私たちの責務」と刀禰諦存基推委副会長が「決意表明」を読み上げ、参拝者一同、今後の同朋運動への取り組みを決意し、幕を閉じた。

（第65号から）

蓮如上人五百回遠忌法要・再建十周年慶讃法要

― 2005年（平成17）４月９、10日

去る四月九、十日の二日間、鷺森別院（佐々木孝昭輪番）で「蓮如上人五百回遠忌法要・再建十周年慶讃法要」がご門主ご親修で勤められた。

今回の法要は、蓮如上人のご遺徳を偲び、また、紀州と蓮如上人についての歴史を踏まえながら、別院再建十周年を迎え、あらためて別院が教区の教化センターとしての機能をより一層発揮することを願って、営まれたもの。

法要当日の二日間は快晴に恵まれ、境内の桜が満開に咲き誇る中、教区内から僧侶、門信徒約二千五百人が参拝、別院界隈は喜びと歓声に包まれた。

（第76号から）

親鸞聖人750回大遠忌法要

― 2010年（平成22）11月24～28日

「親鸞聖人750回大遠忌法要」が昨年、11月24日から28日までの5日間、鷺森別院で勤修された。この法要期間中に寺族婦人会、仏教壮年会、門徒総代会、仏教婦人会の研修会もあわせて開催され、親鸞聖人の遺徳を偲ぶ人々で境内は賑わった。

このたびの法要では大遠忌のために新たに定められた「宗祖讃仰作法第一種・第三種」によってお勤めが行われた。「第三種」の音楽法要は、雅楽・コーラス・エレクトーンが美しく調和した荘厳なお勤めが特徴的。参拝者の多くが「感動的でした」「心に響くすばらしい法要でした」とこの法要に出会えたことを喜んでいた。

（第92号から）

100号を支えた編集者

この100号特集号を発行するにあたって、創刊号の編集に携わった初代編集者と現在の編集員に編集の苦労やこれまで紙面に出なかった〈裏面史〉を綴って頂きました。

紙面に出なかった裏面史

教区と寺院のパイプ役

元編集委員　藤範　信彦

教区報が100号を迎えるので、発刊当時のことを書くようにとの依頼がありましたので、昔のことを思い出しながら記してみました。40年も前のことなので高齢になった今、その当時のことは記憶にないことも多いと思います。

県庁に勤めており、教団や教区のことには無関心で、別院がどっちをむいているかしらないような状態でした。ある日、滋賀の中岡順孝さんから電話があり、今度、鷺森別院の輪番にきたので顔を出してほしいとのこと、中岡さんとは龍大生のとき、龍谷新聞部で御一緒だった仲、長いことご無沙汰していたことをお互いに詫びながら、龍新時代の話のなかで、新しく教区報を出さないかとのことになり、第1号の発刊にとりかかりました。（昭和47年頃だと思います。）1面に中岡さんの就任の挨拶と教区会議長の藤範晃誠さん（伊那組教楽寺住職）、教区教化推進協議会（教推協）会長の浜口大声さん（有田南組安楽寺住職）に「教区報発刊によせて」を執筆してもらい、主に教推協の各部会の活動状況等を記事にしました。

ところが、第2号に中岡輪番の離任の挨拶を載せることになってしまいました。1年にも満たない異動には驚きました。県庁では考えられないことなので、本山に抗議をと騒ぎましたが、本人は「絶対に何もしないでくれ」とかたく止められましたが、現在でも本山の人事のアップダウンが続いているように思われます。

乗りかけた舟なので、これで止めるわけにもいかず、それからは原稿集めから大組、校正と走りまわりました。1面のトップには何をもってくるか、今、教区内で何に関心があるのか等々、当時の要職者にお願いをしたり、また「紀州御旧跡めぐり」や「紀州の御法物」を連載し、関係の方々に説明を記してもらいました。

教区報は教務所（別院）と一般寺院とのパイプを太くする役割をもっています。関係各位の御努力に敬意を表します。

（伊那組光円寺住職）

仏法ひろまれをモットーに

元編集委員　中谷　眞澄

この度、教区報「さぎのもり」の100号の発行の運びとなりましたこと、誠におめでとうございます。今後、益々のご発展をお念じ申しあげます。

さて、当時を顧みますと、はや4半世紀が経ちました。以前の鷺森別院の一室をお借りして編集委員会を何回も開いたことを思い出します。編集委員長を中心に数名の編集委員で構成されスタートしました。

目的は、和歌山教区の活動の記録であり、また、仏法広まれをモットーに、教区の寺院にお知らせをし、多くの方に参拝して頂くことが目的で、そのため教区内の主な行事予定も掲載、また寺院の慶弔記事も載せることになりました。年間4回、季節毎に発行すること、サイズはB5版で、読み易くするため、写真を挿入することになりました。

当時は編集委員が中心となり撮影し、また、寺院の住職方にお願いしてご協力を頂きました。当時の写真は、主流は白黒写真でした。

こうして1号の発行ができる運びとなった時は、大変な喜びと感動でした。

最後になりますが、1号から100号まで継続して「さぎのもり」教区報を発行してくださった関係者の皆様のご尽力とご苦労に対し、また、別院の皆様のご配慮とおもてなしに心より感謝申しあげます。

（和歌山西組正立寺住職）

時には、ティータイムもあり、和気藹々（わきあいあい）でした。

1号作成にあたり、次のようなきまりを決めました。

ご門徒の声を紙面に

編集委員　藤本　惠英

２００３（平成15）年10月1日号「70号」から教区報の編集委員を務めている。その11年間のことは、後で記すことにしたい。

というのも、「和歌山教区報」とのご縁は、第42号に遡る。どういういきさつでこの教区報の編集に携わるようになったのかというと、私が本願寺新報の記者時代に取材で鷺森別院に行ったとき、当時の職員（おそらく藤下先生ではなかったか、もしくはお浄土に帰られた板原さん）から、教区報の編集を依頼されたのがその始まり。

当時は職員が取材し書き上げられた原稿に目を通し文章を校正、見出しをつけて、一つの紙面として組み立てていく、という紙面のレイアウトを担当したのである。当初は別院に取材で来たときに、編集作業をして本山へ帰るということだったが、いつしか、原稿が京都まで送られてきて、それをページ割り、見出しをつけてレイアウトをして別院に送り返すというまさにアナログな編集をしてきた。それは昭和63年からのことであり、実に27年間にわたって、この教区報の編集に関わってきていることになる。

現在の編集委員として、これだけは書き残しておきたいことがある。それは「教区報」は「官報」か、それとも「教化紙」か。このことは編集会議で数限りなく議論してきたことである。そのときに話題に上がったのは大阪教区の「御堂さん」であった。当時他教区から発行されているものでは、画期的な紙面作りが話題となっていた。その紙面に感化されて「和歌山教区報もご門徒にも読んでもらえる法味豊かな紙面内容にすべき」「今まで通り、教区内の出来事を知らせるだけでいい」。さまざまな意見が出されたが、なかなか「官報」色から抜け出せなかったことを覚えている。

しかし、ここ数年の紙面を見てみると、もちろん官報的な記事も掲載しつつ、法話をはじめ、気軽に読めるハウツー仏事など、身近な紙面内容となってると、自負しているのは私だけだろうか。ただ一つ、編集していて過去に一体何件の投稿（いわゆる反響）があっただろうか。1年以上発行されることがなかったときですら「教区報はいつ出るんや」の厳しい声も聞かれかなった。もっともっと読んでもらって「こんな記事はつまらない」「もっと紀南にも取材にきてよぉ」。こんな声が届くことを期待しながら、編集に携わっていきたい。

（伊那組極楽寺住職）

先人の歩み知る貴重な資料

和歌山教区教務所長　髙橋　格昭

このたび、教区報「さぎのもり」が節目となる第100号発刊の運びとなり、編集を担当している伝道広報部において、第一号から第99号の中で掲載された主な教区・鷺森別院の歩みを振り返り過去に学ぼうという事になりました。

和歌山教区報は今から41年前の昭和48年に第1号が発刊されましたが、それは現在の即如門主さまが勝如前門主さまより法統を継承された時期であり、今の宗門の状況と重なり、時代の移り変わりを実感すると同時に、また当時の宗門・教区を取り巻く情勢と取り組みに大変に興味が湧きました。各号を読み進めて参りますと、現在推進されている「宗門長期振興計画」にある人材の育成や寺院の活性化という課題も、時代に相応した新しい取り組みのように見えますが、実は40年前も課題とされていたことばかりであると知らされます。

それは今日に至るまで進展がなかったという事では決してありません。どの時代にあっても、その課題は決して消えることはなく、人を変え・場所を変えて、多くの先人たちがその問題と向き合い、その時と場に応じた活動が展開されてきたのです。

今、私に、７５０年の歳月を超えて親鸞聖人の声が届いているのは、そのご尽力のおかげであり、その一つ一つが、阿弥陀さまの絶え間ないおはたらきのもと、親鸞聖人のご遺徳によるものです。

教区報は先人たちの歩みを知るとても貴重な資料であり、これを書き残してくださったみなさまの並々ならぬご苦労に感謝を申しあげ、また、親鸞聖人の歩まれた道を、私たちも一歩づつ歩ませていただく中で、先達の残してくださった道しるべとして、この新聞が一人でも多くの方に親しまれることを願います。

青色青光

ご参加ください

本山

4～6月の催し

4月8日　花まつり（灌仏会）

4月12～15日　春の法要
12～14日＝本願寺第23代勝如上人13回忌法要、15日＝立教開宗記念法要

4月17、18日　大谷本廟総追悼法要

5月20、21日　宗祖降誕会

6月5日　御消息発布式

6月6日　法統継承式

6月8～11日　大谷本廟納骨・永代経法要

和歌山教区

4～6月の催し

4月10日　近畿同朋運動推進協議会常任委員会（大阪）

4月14日　仏教婦人会連盟委員会（鷺森別院）

4月17日　寺族婦人会連盟委員会（鷺森別院）

4月19日　仏教婦人会総連盟総会（西本願寺）

4月23日　少年連盟総会（鷺森別院）

4月26日　恵信尼さまの集い（西本願寺聞法会館）

4月未定　ビハーラ和歌山委員会

4月未定　門徒総代会委員会

4月未定　寺族青年連盟委員会

5月9日　仏教婦人会連盟清掃奉仕（鷺森別院）

5月13日　仏教壮年会連盟総会（鷺森別院）

5月14日　寺族婦人会連盟総会（鷺森別院）

5月15日　門徒総代会総会（鷺森別院）

5月16日　仏教婦人会連盟総会（鷺森別院）

5月24日　保育連盟補任式（西本願寺）

6月13日　近畿同朋運動推進協議会総会（本願寺）

日高別院の催し

■常例法座

4月20日、岩本智依師（奈良市杏町・常蓮寺）。午後1時30分から3時。

■降誕会・花まつり・湯川忌法要

5月11日、午後1時からお勤めに引き続き、御坊幼稚園の園児らが、お釈迦さまのご誕生をお祝いするため、白象の山車を引きながら日高別院周辺を練り歩く。

■永代経

6月20日、午後1時30分から本堂で仏説阿弥陀経をお勤めし、黒田哲夫師（桑名市・教専寺）が法話。3時まで。

鷺森別院で6教区の青年布教使が研修会

本堂で公開布教大会も

鷺森別院で2月18、19日、滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫、和歌山の各教区から参加した81人の青年布教使が、「親鸞さまの魅力を現代に！」をテーマに1泊2日の研修を行った。

初日は、法話の具体的なきっかけとして①お寺の機能を広くアピールすること②宗教に正しい認識を持ってもらうこと③浄土真宗のみ教えを正しく伝えること④御同朋の社会をめざすこと（社会の現実とどう向き合うか）の4つのポイントが挙げられ、その実演のため、4人の青年布教使が鷺森別院本堂での公開布教大会に臨んだ。

2日目は天岸浄円師（布教団連合総団長補佐）の講義を聴き、研鑽を深めた。

僧侶研修会で葬儀と過去帳について学ぶ

和歌山教区住職・僧侶・寺族研修会が2月6日、鷺森別院本堂で開かれ、77人が熱心な研修を行った。

教区内の僧侶らが熱心に研修

前半の葬送儀礼についての講義では、今小路覚真師（前本願寺会行事）が、施主の立場になって葬儀を見つめることの大切さを強調。

「葬儀不要論の多くはお金がかかるから。一番かかるのは荘厳壇。本堂の内陣を使って葬儀をすれば、新たに荘厳壇は要らない。ご門徒に勧められるのでは」

「葬儀で正信念仏偈をお勤めするのは、往相回向だけでなく還相回向が説かれているから。あなた自身が人としてお別れし、仏さまとして還ってくる。そこには人生を本当に納得している世界がある」と語った。

後半は「過去帳またはこれに類する帳簿の開示問題」について、岩本孝樹師（元安芸教区過去帳問題対応委員）が話した。

岩本師は、一昨年5月7日に放送されたNHKのテレビ番組「鶴瓶の家族に乾杯」で、出演者がルーツ探しのため安芸教区のある寺院を訪れた際、対応した住職と坊守が「門徒明細簿」と「門徒戸数控」を「過去帳」と言って開示した問題の経緯を説明。

過去帳とこれに類する帳簿は閲覧禁止とし、ご門徒からの照会に対しては、直接のご先祖に関する部分だけを抜き書きすること、過去帳の記載事項を①法名②俗名③死亡年月日④性別⑤年齢⑥施主との続柄⑦施主の現住所に限定するという宗派の規定を確認した。

次ページに続く

青色青光

ご参加ください

前ページから続く

門徒総代が活動報告

門徒総代が所属寺院の活動などを報告する「モデル事業報告会」が2月23日、和歌山東組が担当して同組善正寺（吉礼）で開かれた。

浄徳寺総代の木村芳孝さんは、昨年9月に妙好人・赤尾の道宗ゆかりの越中五箇山などを訪れた研修旅行によって組のまとまりが良くなった、善正寺総代の安原俊晴さんは、同寺本堂再建事業を通して門信徒に活気が出たと報告。他組の総代らは真剣に耳を傾けていた。

教区内各組

4～6月の催し

和歌山組

5月未定　第6期連続研修会①（鷺森別院）

4月19日　第5期連続研修会⑦（鷺森別院）

6月21日　第5期連続研修会⑧（鷺森別院）

和歌山北組

4月27日　組内会（慶圓寺）

5月24日　第11期連続研修会⑤（正念寺）

5月31日　仏教婦人会連盟総会（教願寺）

6月14日　門徒総代会総会（慶圓寺）

6月21日　キッズサンガサポーター会議（慶圓寺）

加茂組

4月27日　組会（願称寺）

5月未定　門徒総代会総会（願称寺）

海南組

4月6日　仏教婦人会連盟総会・研修会（了賢寺）

6月14日　組会（了賢寺）

海草組

6月未定　門徒総代会総会、門徒総代会・仏教婦人会・仏教壮年会・寺族婦人会合同研修会（報徳寺）

6月未定、仏教婦人会総会・研修会（積善寺）

6月未定、寺族婦人会総会・研修会（安養寺）

伊那組

5月8日　仏教婦人会連盟総会・研修会（明光寺）

5月下旬　門徒総代会役員会（西照寺）

5月下旬　組内役員会（橋本・極楽寺）

6月未定　組内会（橋本・極楽寺）

6月未定　寺族婦人会総会（教善寺）

6月下旬　門徒総代会総会・研修会（橋本・極楽寺）

有賀組

4月13日　仏教婦人会総会（円照寺）

5月11日　仏教壮年会連盟総会40周年記念（西方寺）

5月31日　組会（かめや）

有田南組

4月27日　仏教婦人会連盟総会、降誕会（円光寺）

5月未定　組会

5月未定　若婦人会役員会

5月　仏教壮年会連盟総会・研修会

6月　第8期連続研修会⑦

有田北組

4月19日　組会、同朋研修会（西光寺）

5月17日　宗祖降誕会（発願寺）

5月下旬　仏教壮年会連盟総会・研修会

6月3日　有田北組研修会・布教聞法会（西光寺）

6月中旬　総代会総会・研修会

6月中　寺族婦人会総会（発願寺）

日高組

4月5日　門徒総代会総会

4月29日　仏教婦人会総会・追悼会（蓮専寺）

御坊組

4月5日　組会（日高別院）

5月11日　日高別院降誕会・花まつり・湯川忌法要

5月未定　仏教婦人会連盟総会・研修会（日高別院）

6月未定　仏教壮年会連盟総会・研修会（日高別院）

6月未定　総代会総会・研修会（日高別院）

紀南組

4月7日　組会（金徳寺）

4月13日　仏教婦人会連盟総会（佛願寺）

6月未定　門徒総代会総会

6月未定　寺族・坊守研修会

昔の遊び体験

有田南組キッズサンガ

有田南組では2月8日、極楽寺（湯浅町栖原）を会場にキッズサンガを開催。53人の子供たちが、竹馬や紙玉鉄砲といった昔のながらの遊びを体験した。

この日のために、組内の門徒推進員も協力して竹馬を作製、当日は仏教婦人会が綿菓子づくりに奮闘するなど、組内門信徒が活躍。参加した保護者ともども楽しいひとときを過ごした。

昔ながらの遊びに興味津々

お寺の役割考える

和歌山北組で協議会

和歌山北組では2月22日、「御同朋の社会をめざす運動」推進協議会を永正寺で開催。58人が参加した。

本山から榮俊英師（寺院活動支援部長）を招き、日常生活のなかでお寺が高齢者にどう関わることができるのか、具体的な事例を聴き、次期実践運動目標策定のための意見交換を行った。

得度

2月15日＝吾勝常樹（加茂組眞教寺）

敬弔

12～2月

▽津村清龍（和歌山組浄専寺・住職）12月5日

▽平岡哲之（御坊組西円寺・前住職）12月29日

▽久岡隆（和歌山北組正覚寺・衆徒）1月24日

▽岡村周晃（海南組遍照寺・住職）2月1日

ご生前のご活躍ご尽力に感謝申し上げ、謹んで敬弔の意を表します。

つれもて聴こら

人生はお浄土への道中

佐々木蓮乗

ある旅人が広野を西に向かい旅をしていると、荒れ狂う水の河、燃え盛る火の河が行く手をさえぎります。二つの河に挟まれて、白い道が対岸に向かって続いていますが、15㌢程の幅しかなく、激しい波と猛炎でとても渡れそうにありません。そんな旅人を見つけ群賊・悪獣が襲ってきます。退くも死、進むも死、とどまるも死という状況におかれた旅人は、意を決してこの細い道を歩み出そうとします。すると東の岸から「この道を行け」という声が、同時に西の岸から「この道を来い」という呼び声が聞こえてきます。その二つの声に導かれて、旅人はその白い道を無事に渡りきり西岸にたどり着きました。

二河白道の図

これは善導大師の「二河白道の例え（二河譬）」です。私の師はこの例えは「他力ただく話が「二河譬」だと言えるのです。

例えに「東岸を娑婆、西岸を浄土として、河の幅が各百歩。その真ん中の白き道もまた百歩である」とあり、親鸞聖人は、この百歩を「人寿百才」と解釈されました。つまり人間の寿命であり、私のこの命が尽きるまで、ずっと激しい波と猛炎に例えられた河に囲まれた煩悩の日暮らしであるということなのです。

調龍叡和上は「無常と宿業と恩愛そして恐ろしき罪業というものが我々を娑婆世界にくくりつけている」と言っておられます。

しかし、その罪業・煩悩の金剛心を顕すために説かれたのだ」と教えてくださいました。金剛心とは、壊れない心であり、壊れないとは、真実ということ、真実とは、仏さまからの廻向であります。本来、真実を持ち合わせない私が、阿弥陀さまから真実信心をいただいて、浄土に参らせていただくことによってでさえ、浄土参りの道が壊れない事を教えてくださっているのです。

また、旅人が、その境遇から、自らの勢いで白道を歩みだそうとする場面がありますが、これは自力心を表しています。

ではなぜ、自力のはからう心が取れ、他力の白道を歩んだのかと言えば、釈迦弥陀二尊の声を聞き、その言葉に順ったからです。西方からの弥陀の呼び声は、「水・火の河に落ちることを恐れる必要はない。落ちないようにしっかりあなたをお守り（摂取）しましょう」という声です。二河譬の絵は、光明を放って行者を包んでいます。

今後、私の人生がどのように展開されたとしても、迷うことのない阿弥陀さまがご用意くださったお浄土への道中であります。

（宍粟市山崎町・西願寺）

～鷺森別院常例法座から～

鷺森別院の催し

■二尊会

5月13日から16日、鷺森別院で二尊像御影が奉懸され勤められる。午後1時30分からお勤め、引き続き、福永充証師（西都市下三財・光善寺）の法話。この期間は各教化団体の集いが開催される。（13日仏教壮年会連盟、14日寺族婦人会連盟、15日門徒総代会、16日仏教婦人会連盟）

■降誕会

5月20日、親鸞聖人の誕生を御祝いする法会を開催。午前10時より本堂にてお勤め、引き続き鷺森別院輪番の法話。その後、鷺森幼稚園園児やコーラスグループが仏教讃歌等を唱和。

■常例法座

4月15、16日、苗村隆之師（京都市下京区櫛笥通・正往寺）。6月15日、黒田哲夫師（桑名市桑部・教専寺）。6月16日、伊井智雄師（和歌山市雑賀崎・極楽寺）。毎座、午後1時30分から3時30分。（5月は二尊会）